

LECTURE

講演会報告

主催した学部等の担当者による報告です。



- 文化創造学部
文化創造フォーラム2008
『世界をまほろばに』
- 薬師寺管主 安田暎胤氏
- 12/18 星が丘キャンパス



奈良の薬師寺管主である安田氏は、これまでヨーロッパ各地の宗教者との懇談を始め、唐代の玄奘三蔵が旅した西域3万キロの踏破、イラン南東部地震の復興支援の視察で現地を訪問するなど、国内外の宗教者との交流を続けています。今回は国際社会に生きていくための心の道しるべについての講演とあって、学生のほか一般の方も多く参加されました。古事記や日本書紀に登場する「まほろばの国」は、自然環

境が保たれ、正しい政治が行われ、文化活動が盛んで社会福祉が充実し、安心して暮らせるところ。地球がそんな「まほろば」であるために、一人ひとりの心づくりが肝心だとして、まほろばの5つの心(感謝、慈悲、敬い、赦し、懺悔)について、ご自身の体験を交えて語られました。最後に、「一生は幸せの連続でも、不幸せの連続でもない。幸せは自分でつくるもの」として、「積善福生」(善を積めば福が生まれる)の言葉を参加者に贈りました。メモを取るなど熱心に聞き入っていた参加者は、大きな拍手で応えていました。

毎年著名人を招いて行っている文化創造フォーラムに、映画監督の山田洋次氏をお招きしました。今回は山田作品についての著書もある吉村英夫本学教授の依頼に応じて来学が実現したものです。



会場の講堂は山田作品のファンである一般来場者も含めて満席状態でした。監督は学生を壇上に上げ、小津安二郎監督の名作『東京物語』の冒頭場面や、「男はつらいよ」の場面を映写しながら、問答形式で映画表現にとって真の「面白さ」とは何かを、分かりやすく説明してくれました。映像に含まれた情報を読み取ることで、さらにそれを言葉で正確に把握することの重要さに気付かされたことは、学生たちにとって大きな収穫となったことでした。数日後に監督の奥様が病気でなくなりました。この講演で聞いたことを、忘れないように胸に刻んでおきたいと思

- 愛知淑徳大学大学院
グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科
設立記念講演会
「イワン・カラマーゾフの悲劇」
- 東京外国語大学学長 亀山郁夫氏
- 11/28 星が丘キャンパス



グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科の設置を記念して、著名なロシア文学研究者であり東京外国語大学学長でもある亀山郁夫教授に講演をお願いしました。ベストセラーになった亀山教授訳のドストエフスキー著「カラマーゾフの兄弟」の意義深い内容に触れ、参加者は皆、感激していました。作家としての強靱な生命力、豊かな性の営み、襲いかかる子供の死、癲癇という「罪」など、諸々の力を内にふくむ根源的な力をもつて、ドストエフスキーがどこまでも否定しようとしたのは、生命のエネルギーの枯渇を生む傲慢さ、神のまなざしを篡奪し、人をそのかすための神になりかわろうとする傲慢さを指摘するのが本著のねらいであった、



と話されました。本研究科の教育目標「グローバル教養人」として質の高い人材育成は、亀山教授がかねてから唱えられている「ここに出てははかしくない知性と教養を備えた人材育成」と相通じるところがあり、実際、本校での講演は、人文学的知性を真つ向から披露された充実感のある内容となりました。



- ジェンダー・女性学研究所主催
第20回定例セミナー
「恋愛と暴力 デートDVにおける力と支配の関係」
- フェミニスト・カウンセラー 具ゆり氏
- 10/30 星が丘キャンパス

デートDV防止に取り組んでいる「アウェア」の認定講師、フェミニスト・カウンセラーの具さんに講演をお願いしました。2006年の調査によると、7人に1人の割合で交際相手から暴力を受けているそうです。暴力というと身体的な暴力を真っ先に考えますが、精神的な暴力も相手に大きな傷を残します。「言葉のナイフ」で



傷つけられた心は自尊心がズタズタになり、以後自信が持てなくなるなど、身体的な傷より回復はずっと難しいそうです。昨今、携帯電話の普及により便利になった反面、交際する相手を束縛するといった深刻な問題が起きているとも指摘されました。相手の携帯電話のメールアドレスを送信したり、すぐにメールを返信することを強制したりといった「束縛」は、愛情ではなく「独占欲」である、具さんは強調されました。自分も相手も尊重しあえる会話(「わたし」メッセージ)を2人の男女学生に即興で実演してもらったワークもあり、学生も一般からの聴衆も「愛情に暴力は要らない」と講師のメッセージに納得した1時間半でした。

- 文学部教育学科企画・運営
第5回文学部講演会
「子どもの発達と教育」
- 愛知教育大学教授
中野靖彦氏
- 10/29 長久手キャンパス



教育学科が企画・運営する講演会では、愛知教育大学の中野靖彦先生をお招きして、ご専門の教育心理学発達心理学の立場から子どもの姿と教育の現状についてお話しいただきました。

30年余に及ぶ愛教大での教育研究と数多くの教員を育ててこられた経験、そして、兼務された付属中学校校長時代や様々な教育現場との触れ合いの中で蓄積された豊富な具体例を交えながらのお話で、笑い声や頷きの連続する、時間も忘れの程の刺激に満ちた楽しい講演会でした。

少子化により、一人の子どもへの親の風圧が大きくなった現在、子どもたちはそれに耐え

製薬会社（エーザイ株式会社）の企業博物館で学芸員兼司書として19年の経験を持つ両氏は、図書館情報学科第1回卒業生です。

博物館の役割としての資料の収集・保存・調査研究・普及活動

- 文学部図書館情報学科企画・運営
第4回文学部講演会
「博物館の舞台裏
～学芸員として、司書として」
- 内藤記念くすり博物館
伊藤恭子氏・野尻佳与子氏
- 10/20 長久手キャンパス



伊藤恭子氏



野尻佳与子氏

動・展示についてだけでなく、そこで働いている学芸員は「雑芸員」とも呼ばれるほど、さまざまな舞台裏の雑務があります。企画展準備のための資料調査や図録執筆、薬用植物園でのイベント開催、小学生を対

るためにいい顔をするようになり、学校でも家庭でもいい子をする子どもたちにはエネルギーの発散が必要であること、そのためにも好奇心をもつて自分で調べ、頭を働かせ、失敗体験も含めて様々な体験をする機会を与えることが大切であること、子どもは任せればできることを信じて、柔軟な対応のできる教師が必要であることなどを熱く語られました。

「先生が元気がなかったら生徒も元気でない、自分が楽しくなければ相手も楽しくない」と強調された教師の姿勢を自ら示し、聴き手の心を捉えた一時間半でした。

象とした夏休み親子教室、蔵書目録編纂やデータベース作り、マスコミなどの取材対応など、博物館とその附属図書館で経験した数々のエピソードをご紹介いただきました。

表面には見えない舞台裏の仕事の苦労やその中に感じるやりがいを実感込めて語っていただき、現在もお「魅力ある博物館」であるために励んでいる様子が印象的でした。

講演後は資料の寄贈受入れ方法や、企画展開催、文系学芸員としての課題点などについて活発な質疑応答が繰り広げられました。学芸員として生き生きと活躍している先輩の姿は将来、博物館で仕事をしたいと希望する学生にとつて身近な存在に映っていました。

- 高等学校・中学校PTA講演会
「足下の自然をみつめて」
- アウトドア・タレント 鉄崎幹人氏
- 11/13 センテナリーホール

名古屋在住のアウトドアタレントの鉄崎氏を迎え、自然に関する興味深いお話を伺いました。名古屋にもまだこんなに自然が残っていること、逆に至るところで自然破壊が進んでいることを、スライドを使って分かりやすく説明してもらいました。時折、クイズなどを織り交ぜながらのお話で、出席した約200人の父母の間からは笑い声と感嘆の声が上がり、例

- 文学部国文学科企画・運営
第7回文学部講演会
「『源氏物語』の物語社会
～紫のゆかり、下衆のさへづり～」
- 龍谷大学准教授 安藤徹氏
- 12/17 長久手キャンパス



安藤先生のご専攻は、平安朝文学・物語社会学。主に「源氏物語」を対象としたご研究で注目されている方です。今年「源氏物語千年紀」とあつて各地の講演会などにひっぱりだこのよう、日本で今もとても忙しい源氏物語研究者といわれるほど活躍になっています。

年にも増して実り多い講演会となりました。

PTAの研修委員の皆さんは力エニアアでの昼食後、少しでもよい講演会が運営されるよう、受付準備や会場整備に奔走されました。講演会後は講師の鉄崎氏を囲んで茶話会が行われ、和気あいあいとした雰囲気の中、親交を深めました。

3、4年生の参加ににくい時期にあたってしまいましたが、1、2年生を中心に会場は満席となり、用意した資料の部数では間に合なくなるほどの盛況でした。「源氏物語千年紀」にふさわしい、有意義な講演会となりました。

今回は「紫のゆかり」と「下衆のさへづり」をキーワードに、「源氏物語」の内と外に関するお話をしていただきました。さまざまな先行テキストを取り込む求心力と、広く後世に受容されていく遠心力とをあわせもつ「源氏物語」の魅力、大変興味深い内容に、学生たちは目を輝かせていました。わかりやすく、テンポよくお話しくださったのも印象的でした。

- 文学部英文学科企画・運営
第6回文学部講演会
「A Sansei's Experience of a Canadian film director」
- ビジュアル・アーティスト、美術教育者
リンダ・オーハーマ氏
- 11/13 長久手キャンパス

リンダ・オーハーマさんは日系カナダ人で、1970年代からビジュアル・アーティストや美術教育者として活動してこられました。91年以降、ドキュメンタリー映画の製作に携わってこれ、91年の短編「The Last Harvest」（最後の収穫）では数々の国際賞を受賞されました。現在は広島県尾

道市で新しい映画を製作中です。

今回は代表作「おばあちゃんのカンパニー」についてお話しいただきました。美しい映像と静かなオーハーマさんの語り口を堪能した90分でした。講演後、聴衆からの質問に、丁寧に答えながら答えるオーハーマさんの姿も印象的でした。